

大変だ!! 「理工系離れ」に議論百出 —高校教諭の見学と懇談会

高津 明彦

(住友金属工業(株)小倉製鉄所)

高校生が理工系を希望しなくなった。

「このままでは、製造業に技術屋・後継者がいなくなる……………」

「本当に、そんなか??」

「これは、大変だ!!……………」

白熱した議論になりました。

「ものづくり教育を考える会」の見学と懇談会を平成6年8月23～24日の両日に、新日本製鐵(株)八幡製鐵所、八幡技術研究部と住友金属工業(株)小倉製鐵所にて開催しました。

本部・支部の役員、九州北部から20名の高校教諭、そして両社から技術者・研究者の参加にて、活発な議論となりました。

見学の後の各教諭の感想は、最近の鋼の進歩に感動されて、大変好評でした。

しかし、中学・高校の「理科離れ」は深刻です。

各教諭の生の声で、

「数学に、ついて来られない生徒が増加している。」

「物理を選択する生徒が年々減少している。」

「来年は、文科・理科系のクラス編成で、理科系を1クラス少なくする。」等、「理科離れ」の進行に拍車のかかる現状が報告されました。

その原因として、

「社会風潮として、「ものづくり」が尊重されない。」

「手づくり玩具や工作が、「ものづくり」の引金であったが、安価な大量のオモチャ、ファミコン、受験戦争に駆逐された。」

「夜遅くまで働く技術屋より、商社・不動産・株・第三次産業に人気が出てきた。」

「レポートが有り、夏休みに実習も有る。大学の理工系は、遊べない……………」と不人気の理由も有る。」

「興味のスタートのはずの小学校が問題だ。工作指導・実験指導の不得意な女性教諭が増えている。」等、と社会の世相そのものが、浮かびました。

では、どうするか?……………」との議論もかなり行いました。しかし、名案は無く、地道に若い人に創造への興味を教えるしかない。……………」との声が多かった様です。

日々の業務に追われる我々にも、日本の教育の根本について考えさせられる両日でした。



秋季講演大会裏方願末記

小野寺 龍太

(九州大学工学部)

何処も同じ学会の楽屋裏二、三の風景。演じますは実行委員とアルバイト。

場面1 平成6年3月頃。材料工学科の某研究室の一室

助教授「じゃ、この線路の南側の道路も要らないんですね。」

教授「ええ、それに北側の道路の曲がり角のゴチャゴチャしたのも消していいそうです。」

助教授「この前は建物を黒くしたり、斑にしたり大分時間をとりましたが、今度は道路ですね。」

教授「済みませんね。僕、マックが使えないからお願いします。へえ、そのボタンを押せばその印は皆消えるんですか。良くできてますね。」

助教授「アッ、こっちは消えちゃった。コリヤどうなってんのかな。すぐ復元しますからちょっと待って下さい。」

教授(心中密かに)「パソコンがなげりゃ、いい加減な手書きで済んだのに便利なものが出てくるとかえって手間がかかるな。」

その後鉄鋼協会の方との会議で「こんな立派な地図を作って頂きたい…」と聞いて、教授(心中密かに)「そんならもっと雑にやりゃ良かった。田舎漢の律儀だった。」

場面2 大会前日の朝。実行委員室

学生「先生、先生。鉄鋼協会の役員さんが建物に入れないと言っています。」

教授「アリヤ、もう来たの。」(と自転車で駆けつける。)'どうもお待たせしました。雨でなくてよかったですね。」

場面3 大会前日の夕刻。実行委員室

助教授「エッ、窓から脱出してきたって」

学生「ハイ、会場設営が終わって出ようとしたら扉が自動ロックであかないんです。」

助教授「航空工学科に泥棒が入らないようにとばかり考えて、学生のはすっかり忘れていた。それにしても会場が一階でよかったな。」

場面4 大会初日朝。実行委員室

実行委員A「鉄鋼会場に行く人達が会場がどこだか判らないと苦情を言っています。」

実行委員B「工学部構内に入るから悪いんだ。外を通るように看板を立てているのに目が見えないのかな。まあ行ってみよう。」

現場で

委員A「成程、地下鉄から沢山出てきたら、これじゃ見えないな。看板の字の回りに赤マジックでギザギザでもつけて見易くしよう。」

委員B「向こう側にも一つ立てましようか。」

委員A「エー。そうしましよう」(心中密かに)「でももう来る人は来てしまって、明日からは誰も看板なんか見ないから六日の菖蒲だな。」